



Title	音声の自己認識とマスクの有無などの外部要因が音響特性と魅力評価に与える影響 [全文の要約]
Author(s)	左, 沿
Citation	北海道大学. 博士(人間科学) 甲第15984号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92317
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Yan_Zuo_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 左 沿

学位論文題名

音声の自己認識とマスクの有無などの外部要因が音響特性と魅力評価に与える影響

声の認識は日常生活において重要な役割を果たしている。この論文の目的は、音声の客観的要因と主観的要因が音声の魅力の評価に与える影響を三つの実験を通して探究することである。

第一章では、顔の魅力評価の関連研究が紹介され、顔の魅力評価の枠組みが分析された。脳科学などからの類推により、聴覚の魅力評価は顔の魅力評価過程に類似していることが提案された、そして聴覚的な魅力評価の枠組みを構築した。聴覚的な魅力評価も、客観的要因と主観的要因に左右されると予測した。

第二章では、親近感（主観的要因）と声の魅力評価の関係について実験を行った。22名の録音参加者の音声クリップが刺激として使用され、録音評価実験には二つのグループに分けられた合計40名が参加した。評価グループ1は、録音参加者22名のうち11名（録音グループ1）を知っているが、残りの11名（録音グループ2）のことは知らないという10名の参加者で構成されており、21歳から32歳までの年齢層からなっていた（平均±標準偏差 = 24.9±2.9歳）。評価グループ2には、録音参加者の誰とも知り合いではない18歳から21歳までの30名の参加者が含まれていた（19.4±0.9歳）。録音評価者は、各刺激を聞いた後に「7. 非常に魅力的」から「1. 全く魅力的でない」(1)までの7件リッカートスケールで各声の魅力の評価するように求められた。一方、録音参加者は録音された自身の音声を聞かずに、声の自己評価アンケートを完成した。その結果、録音者による自己評価と、自分の声の録音を聞かずに行われた声の魅力の外部評価との間に相関は見られなかった。ただし、男女ともに自分の声の魅力を過小評価する傾向があったが、この傾向は女性の声グループではより顕著で、男性の声グループではそれほど顕著ではなかった。また、馴染みの影響による声の魅力の過大評価（声の魅力の評価に対する単なる露出効果）が発生し、男性の声グループと女性の声グループの声の魅力には有意な差が見られなかった。

第三章および第四章では、マスクの着用が話者の音響パラメーターと評価者の魅力評価に与える影響に関する、二つの実験を報告した。22名の録音参加者のマスクを着用した声と着用していない声が音響測定を通じて分析され、それらについて別の27名の被験者が魅力の評価を行った。結果は、マスクが声の時間領域の声門流や非周期性パラメーターに影響を与えなかった一方で、音の強さ（両方）、H1-H2（女性）、およびH1-A3（女性）などの周期性パラメーターに影響を与えた可能性があり、最後の2つのパラメーターでは、マスクを着用していない状態で録音された声の魅力の評価が、マスクを着用している状態で録音された声の評価よりも僅かに有意に高かった。結論として、マスクの着用は女性の声の評価に僅かな影響を与える可能性があることが分かった。これらの評価は音響測定の結果と一致していたことを討論した。

この三つの実験の結果は第一章で構築した聴覚的な魅力評価の枠組みの主張を支持するものとなっている。そこで、声の魅力が、単に物理的な要因（マスク着用の有無）だけでなく、主観的な要因（同一の声質の声に対する評価における親近感の効果）によっても影響を受けるという枠組みは、顔の魅力の評価に基づいて構築されたものであり、それは再現性があるものだと結論づけることができる。